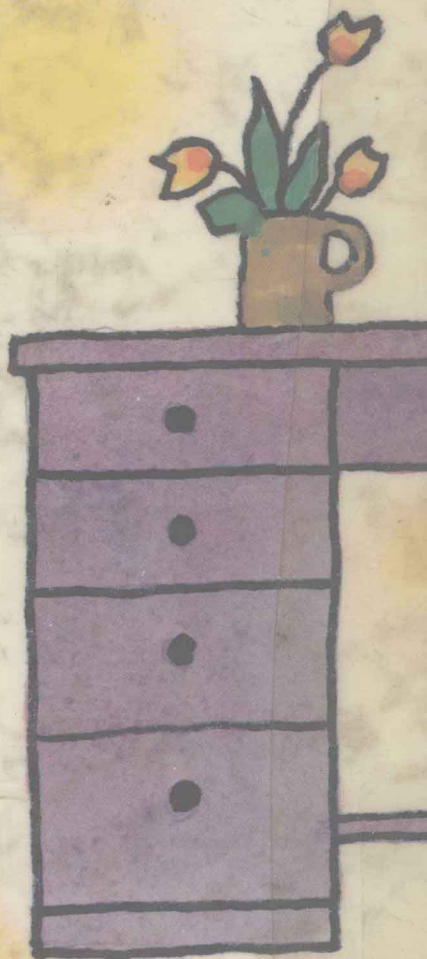


机のなかのひみつ

河野貴子作 宮田武彦絵





子どもの文学

机 の な か の ひ み つ

NDC 913 偕成社 166p. 23cm 1979年

1979年12月 初版第1刷

著 者	こ 河	の 野	たか 貴	こ 子
-----	--------	--------	---------	--------

発行者	今	村	廣
-----	---	---	---

発行所 株式会社 偕 成 社

東京都新宿区市ヶ谷砂土原町3の5

電話 (03) 260—3221 (代) 〒162

振替 東京5—1352番

印 刷 新 興 印 刷 製 本 株 式 会 社

製 本 文 勇 堂 製 本 工 業 株 式 会 社

落丁本・乱丁本はおとりかえいたします。

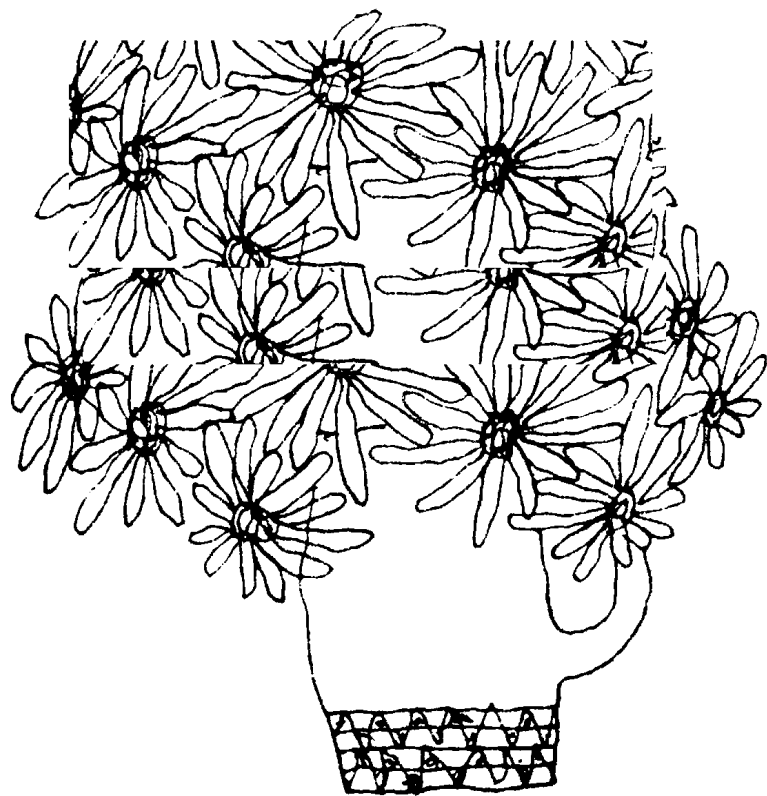
8393-626350-0904

Printed in Japan

©河野貴子 宮田武彦 1979

机のよかのひみつ

河野貴子作 宮田武彦絵



● はじめに

かびくさい物置ものおき

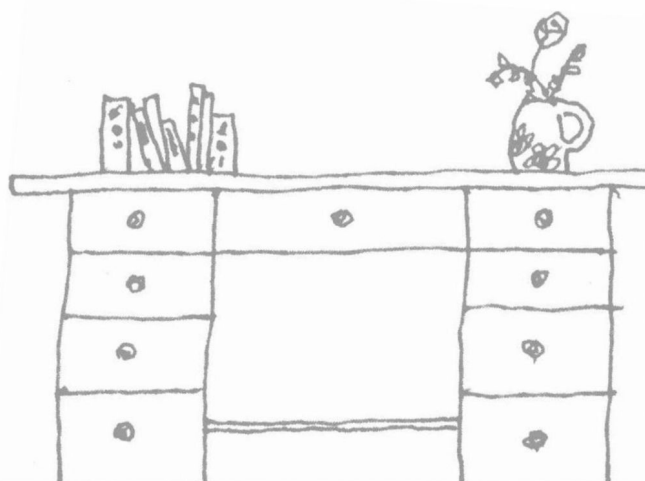
天まどのうすあかり

むかしの机つくえ

引きだしのなかのひみつ

かすかな声

ささやくのは だれ？





机つくえのなかのひみつ／もくじ

1 机つくえがほしい 3

2 おじいさんの家へ 25

3 写真しゃしんのひみつ 47

4 おばあさんとおかあさん 65

5 金吾きんごくんに出あう 81

6 おとなのもめごと 101

7 タイム・カプセル 118

8 写真しゃしんがもえた！ 142

あとがき 166





作者・河野 貴子（こうの たかこ）

広島市に生まれ、東京、横浜で少女時代をすごす。鶴見女子短期大学国文科卒業。神奈川県警察本部などで9年ほど雑誌編集にかかわった後、フリーライターとして出版・マスコミの仕事にたずさわる。本作が児童文学の処女作である。住所／横浜市鶴見区駒岡町1698

画家・宮田 武彦（みやた たけひこ）

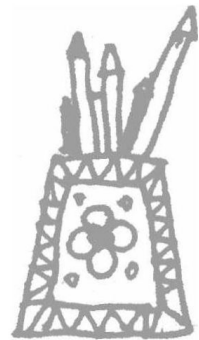
1907年東京都に生まれる。東京美術学校洋画科卒業。現在、雑誌・単行本などのさし絵その他、幅広く活躍している。春陽会会員。児童書では、絵本『みにくいあひるの子』、さし絵『でてきたドジマサ』『四年四組の風』等がある。住所／東京都目黒区柿の木坂2-5-17

机のなかのひみつ

河野貴子



1 机がほしい



「わたし、もう四年生だもん。勉強、いっぱいしなくっちゃ。」

「ああ、そうだな。しっかり勉強してくれよ。」

「でもさあ、机、元太郎といっしょに付かっていると、なにかと不便なんだ。」

「そういわずに、けんかしないで、なかよくつかえよ。」

「わたしのだけの机があったらなあ。」

春休みのはるやすみのあいだじゅう、わたしのだけの机がほしい、とそれとなくいつていたのに、おと

うさんたら、ちっとも気がついてくれない。

新学期用にしんがつかきよにそろえた、まあたらしいノートやえんぴつを、机の引きだしにしまったり、

元太郎げんたろうの絵本えほんにはさまれた学習雑誌がくしゅうざっしを、本だなからとりだしたりするたびに、じぶんの机つくえがほしいという思いがつよくなっていった。

新学期しんがつきがはじまってまもなく、思いきって、おとうさんにねだってみた。

「ねえ、わたしだけの机がほしいわ。」

「ああ、考えところ。」

おとうさんは、あっさりうなずいてくれた。

なんだ、こんなことなら、もっとはやくいえばよかった。うれしくて、胃いのあたりが、くつくつとうごきそうだ。わたしは、両手りょうてで胸むねをぎゅっとだきしめた。

なにかあると、胸をしめつけるように両うでをかさねるのは、わたしのくせだ。そうしていれば、心がおちつくからだ。

あした買かってくれるかな、それとも、こんどの日曜日にちようびに買いにいくのかな、なんて思ったら、ひとりでにわらいがこみあげてくる。

その日から、わたしの頭あたまは、机のことではっぱいになった。

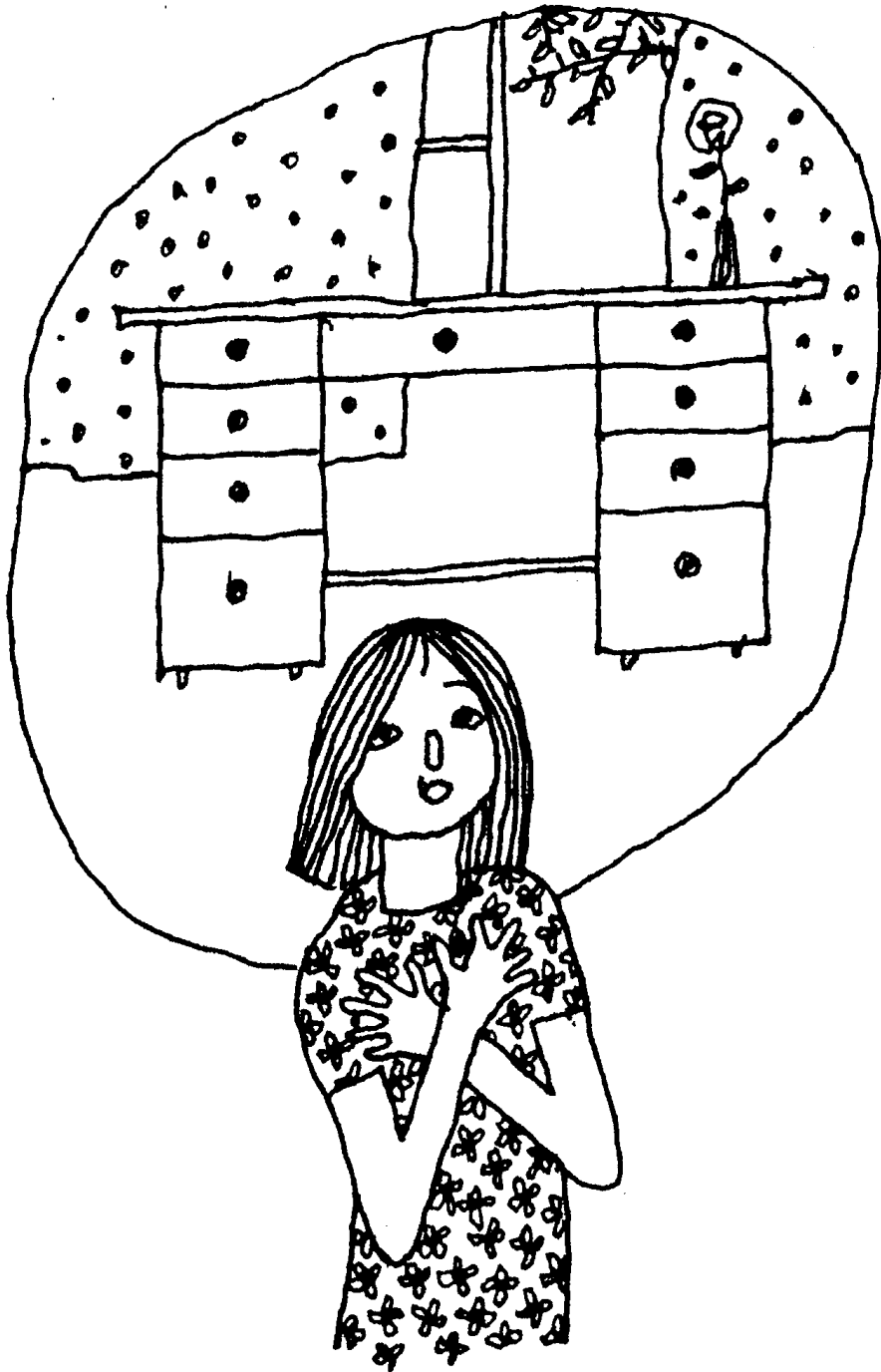
わたしだけの机つくえが手にはいりさえすれば、すぐにでも、成績せいせきがあがりそうな気がする。クラスでいちばん勉強べんきょうができるとなれば……。もちろん、みんなから尊敬そんけいされるだろう。先生からもみとめられて、学校じゅうの注目ちゅうもくのまただ。人気者にんきもののわたしは、いつも友だちにとりまかれて……。

つごうのいい空想くうそうが、とめどもなくひろがっていく。

机つくえの上には、かわいい花をかざっておきたいな。画用紙がようしや絵えの具ぐは、ひろい引きだしにいれよう。ノートと筆ふではこは、小さいほうの上の引きだしがいい。工作用こうさくようの小物こものは、まんなかの引きだしに。下のふかい引きだしには、わたしの〈宝物たからもの〉をしまっとくつもりだ。

七宝焼しっぽうやきのペンダント。ビーズの指輪ゆびわとイヤリング。鎌倉かまくらぼりの小さな手鏡てかがみ。西陣にしじんおりのさいふ。千代紙ちよがみでできた小ばこ。人形にんぎょうをかたどった土鈴どれい。ガラス細工さいくの動物たち。おし花のついたしおり。いろいろなはぎれ。それと、洗いざらしのふちのほつれたハンカチ。

うすむらさき色の花のぬいとりがある白いハンカチ——。これには、たいせつな思い出がひめられている。



いまのアパートにきたのは、二年まえだが、そのひっこし準備のため、おもちゃばこを整理させられたことがあった。

茶ばこのおもちゃ入れは、赤ん坊のころからのおもちゃでいっぱいだった。こわれてつかいものにならなくなったおもちゃと、まだすてるにはおいしいおもちゃとを、ひとつひとつよりわけた。

どうして、ひっこしなんかするんだろうと、わたしは、おもちゃ選びは、気がすすまなかつた。ものがなしい思いで、かた手のもげた人形や、まんぞくにそろっていないままごと道具や、セルロイドのおしゃぶりなどを、おもちゃの山からぬきだしていった。

一週間ほどまえに、おばあさんから、

「もうすぐ、麻樹たちは、おばあさんとわかれて、この家からひっこしていくんだよ。」と、きかされていたからだ。

どういうわけでひっこすのかは、おばあさんも、おじいさんも、おとうさんも、そして、

あたらしいおかあさんも、とうとう、だれもおしえてくれなかった。けれど、それがゆかいな事情じじょうでないことは、わたしにもうすうすわかつていた。

(子どもって、そんだ。おとながきめたとおりにさせられて。わたしはひっこしなんかしたくないのに……)

鼻はながつーんとした。おもちゃがぼうつとにじんだ。

いらないもののなかに、赤いハンドバッグもいれようか、まよった。わたしの手のひらにのりそうな、小さなビニールのバッグだ。

すてようか、とっておこうか、まよいながら、パチッと口がねをはずしてみた。と、からっぽだとばかり思ったなかに、くしゃくしゃにまるめたハンカチがはいっていた。

あれっ、とひろげてみた。白いハンカチだった。四すみに、うすむらさき色の小さな花のぬいとりがしてある。あっちこっちに茶色ちやいろのしみがついて、よごれている。

ハンカチをしげしげながめているうちに、三つのときのある思い出が、じわじわとよみがえってきた。

その日は、クリスマスだった。

「きょうは、おかあさんが一年ぶりで、退院する日だよ。さあ、麻樹、大学病院へ、おかあさんをむかえにいきましょうね。」

「わあい、ばんざーい。ばんざーい。おかあさんがかえってくるう。」

ゆうべ、サンタクロースからプレゼントされたばかりの、赤いハンドバッグを持ったわたしは、うきうきと、おとうさんの運転する車にのりこんだ。

ツリーを、色あざやかにかざりつけたり、店の入り口を、色電気でふちどったり、通りのアーチに、金銀のモールをつりさげたりして、さまざまによそおいをこらした町を走りぬけた。

いちだんとポリュームをあげたジングルベルのメロディが、おかあさんにあえるうれしさをかきたてた。

おかあーさん

わたしーは これかーら

あいにく へーい

ジングルベール ジングルベール

.....

わたしは、じぶんかってなかえ歌^{うた}を口ずさみながら、おしりで調子^{ちようし}をとって、車のシートの上で、ぴょんぴょんはねていた。

大学病院^{びよういん}につくと、おかあさんは、すっかり身^みじたくをととのえて、わたしたちを待^まっていた。

わたしは、病室^{びようしつ}のドアをいきおいよくあけて、走りよった。

「おかあさーん。」

かすりのきものをきて、ベッドのふちにこしかけていたおかあさんが、笑^{えが}顔をむけた。